

成田克矢教授についての回想（原稿版）

『東京大学教育学部六十年史』教育学部六十年史編集委員会、教育学会 60 周年記念事業推進室編集、東京大学大学院教育学研究科・教育学部発行、p.256

成田克矢先生がおられた 1 年数ヶ月

広瀬裕子(専修大学)

成田克矢先生が教育行政学の研究室に着任されたのは私が修士 2 年になった 1979 年 4 月、研究室が指導教官不在の 8 ヶ月を経験した後である。翌年の夏に先生が病でお亡くなりになるまでの 1 年数ヶ月について語るには、当時の研究室がどのような状況にあったかという背景に触れないわけにはいかない。

教育行政学研究室は長らく五十嵐顕、持田栄一両先生の二頭体制で運営されていた。この二頭体制は教育財政学と教育行政学の二領域体制ということもできるが、研究手法と分析観点の違い、いや、政治的な立場の違いを纏った二頭だったといった方が実体に近い。五十嵐ゼミと持田ゼミの院生たちは、シューレのように「結束」して相対峙していた。反文部省という点では共通するものの、両者の間では研究の視角も内容も異なり、それよりもなによりもそれぞれのメンバーが日常的に会話を交わすことも同室に集うこともよほどのことがなければ無かった。今次の研究室の状況からは想像もできないような様態であったと思う。

1977 年の 3 月に五十嵐先生が定年で退官され、持田先生がその翌年 1978 年の夏に病で急逝されると、教育行政学研究室は指導教官不在の時期を迎えることになる。その間も、院生たちの「結束」は強固に維持されていた。

そのまっただ中に降り立った成田先生は、研究室の空気を「健全」だとは思われなかったのだろう、ニューズレター「福寿草」を発行するなど文化の「刷新」を図ろうとされた。研究室に支配的だった理論研究スタイルを、「それらは意見の表明であって論文ではない」と評し、実証的研究スタイルへと誘導されようともした。大学院のゼミのテーマを国民教育権論、国家教育権論それぞれの再検討という「初歩」に設定されたのは、それらの解釈をめぐる鋭く対立していた両グループの、理論的解きほぐしを意図してのことだろう。

ただ、当時の院生たちが素直であったかという、必ずしもそうであったとはいえなかったようにも思う。先生が描いたアカデミズムのスタイルがすぐに研究室の色になったわけではなかった。しかし、先生が蒔かれた種は密かに根を下ろしていたようだ。今も続く『教育行政学研究室紀要』は成田先生が蒔いた種の一つである。